

農業・農村と女性表象の親和性に関する研究

一宮 真佐子

(京都大学大学院文学研究科グローバルCOE研究員)

2012年3月



京都大学グローバル COE

「親密圏と公共圏の再編成をめざすアジア拠点」

Global COE for Reconstruction of the Intimate and Public Spheres in 21st Century Asia

〒606-8501 京都市左京区吉田本町 京都大学大学院文学研究科

Email: intimacy@socio.kyoto-u.ac.jp URL: <http://www.gcoe-intimacy.jp/>

目次

1. 本研究の課題
 - 1-1. 本研究の背景
 - 1-2. 本研究の課題

2. 先行研究に見る女性表象—学術・政策面における農村女性
 - 2-1. 女性と自然—「女性原理」へのフェミニズムからの批判
 - 2-2. 危機的状況における周辺化されたものの動員
 - 2-3. 農政における「女性」
 - 2-4. 農村女性のステレオタイプに関する研究

3. マンガ作品における農村女性
 - 3-1. 農業・農村マンガについて
 - 3-2. 70年代の農村女性のステレオタイプ～農家の嫁の条件

4. 『あの山越えて』の設定および描写
 - 4-1. 作品概要と主なキャラクター設定
 - 4-2. 主人公の家族関係～妻・嫁・教員として
 - 4-3. 農業・農村と女性を結びつける要素
 - 4-4. 「女性的」であることによる保障

5. まとめ—農業・農村と女性の結びつき
 - 5-1. 学術とポピュラーカルチャーにおけるステレオタイプとその変化
 - 5-2. 農政における女性の位置づけの変化とその背景
 - 5-3. おわりに

参考・引用文献

図版資料

1. 本研究の課題

1-1. 本研究の背景

近年、農村活性化の文脈で女性の役割が強調され、期待が高まっている。地域における組織への積極的な参加、貢献やリーダーシップの発揮、起業などが期待されており、その推進のための施策が取られている。例えば、農村女性研究で着目されている靄理恵子の著作では、副題に「農の元気は女性から」（靄、2007）とあるように、女性の活力が期待されているのである。

しかし、なぜ、ここで性別が取り上げられなくてはならないのか。地域活性化のための取組において、特に性別を重視する必要があるのだろうか。これについては、農村における女性の地位向上が1980年代前半から政策課題として上がっており、一般的な女性の社会進出、社会参画が推進される動向の一部だと考えるのが通常の解釈であろう。「女性」に限定する支援事業などの支出根拠として、「女性」であることの意義が延べられる必要がある、という政策技術的な問題である。

だが、女性支援政策推進上の問題、と安易に解釈していいのだろうか。以下のような解釈もあり得るだろう。まず、農村女性に課せられる私的領域（家庭）での性別役割分業の社会的領域への拡大であるという解釈、次に危機的状況に際して、それまでは外部化されていたものが取り込まれるという解釈もありうるだろう。

一点目について、熊谷苑子は、戦後の生活改善普及事業の中で女性の生活技術の向上技術の指導が行われ、これがのちのち農家女性の経済活動の資源を提供したことを「これらの経済活動は家族労働における再生産労働の延長にある」としている（熊谷、1995、P22）。これらの経済活動は、もとは自分の財布を持たない農家女性たちがわずかな現金収入を求めて、朝市などで販売を行ったりしたことに始まり、近年では女性による起業など、様々な地域活性化活動につながっている¹。これは自家消費用の野菜の生産や料理という家事労働が、社会的領域に拡大されたことを示している。

二点目については、過去に類似した現象で、GATT・ウルグアイラウンド時に農業・農村の多面的機能が提唱され、農業生産面以外に着目されたことがある。この危機的状況での女性の取り込みについても、やはり熊谷が、第一に「農業の担い手の衰退、高齢化と男性労働の減少」、第二に「全世界的な、女性の平等を求めるイデオロギー的・政治的潮流」を背景に、女性労働が重要視されるようになったことを指摘している（熊谷、1995、P8）。

¹ 現金収入獲得の行動が地域活動に結び付いて行った事例については上掲の靄（2007）に詳しく、また女性起業については多数の事例報告があり、熊谷（1995）や岩崎（1995）などがある。

これらの解釈が生じ、さらには現実に政策や活動として成立する背後では、農業という職業、農村空間や農村コミュニティと、個人を捨象した「女性」のイメージが結びつけられているのではないだろうか。つまり、一般に家庭内で食や育児を担うとされてきた「女性」イメージ（女性らしさ、性別役割分業）と農業・農村のイメージ（自然環境、食など）は結びつけられやすく、よく目にする「元気で明るい農村女性」というキャッチフレーズに代表されるような、農業・農村の活性化言説における女性の称揚を支えているのではないか。

1-2. 本研究の課題

このように見てくると、性差別をなくすため、男女共同参画社会実現のため、ジェンダー・フリー（性別情報不問）やバイアス・フリー（脱偏見）などが進められている中で、農業・農村においてはジェンダー・イメージが強化されているのではないだろうか。

現代日本における農業・農村と女性イメージの結びつき、これは両者の親和性といっていいたろう。両者はなぜ、そしてどのような要素において結びつけられるのか。そして、ステレオタイプなジェンダー・イメージは変化しているのか。変化しているのならば、それはどのような変化なのか。上で述べたように、「強化」されているのだろうか。

そこで、本研究では二つの課題を立てた。第一に、学術研究において指摘され、また政策で提示されるステレオタイプなイメージにおける、農業・農村と女性のイメージの結びつきを明らかにすることである。これは、専門家による「公的」なイメージに関する言説であり、他にも教育の中で示され、刷り込まれるイメージも、それに属する。しかし、より広範な影響力を持つのは、日常的に触れる「私的」な領域、ポピュラーカルチャーが提供するイメージであろう。よって、第二の課題として、ポピュラーカルチャー、具体的にはマンガ作品を取り上げ、その中での農村女性のイメージを検討することで、日本の農業・農村と女性イメージがどのように結びつけられているのか、またそのイメージの変化について明らかにすることにする。

まず次節では、第一の課題について、特に学術・政策面でのステレオタイプイメージの解明のため、国内外の先行研究で論じられる農業・農村と女性の関連、そして日本農政の流れと位置づけを見ていく。

第3節では、第二の課題について、まずは1970年代のマンガ作品を取り上げ、ポピュラーカルチャーに表れる農村女性のステレオタイプについて見ていく。続けて第4節では、2000年代に発表されたマンガ作品のキャラクター設定や描写から、近年の農村女性のイメージを明らかにし、70年代作品との比較を行う。

最後に第5節では、農村女性のステレオタイプイメージと近年のポピュラーカルチャーでのイメージの変化とその特徴をまとめる。

2. 先行研究に見る女性表象—学術・政策面における農村女性

2-1. 女性と自然—「女性原理」へのフェミニズムからの批判

西欧社会をはじめとして、「文化／自然」、「理性／感情」、「能動／受動」、「公的／私的」が書き込まれた「男／女」という、二項対立的ジェンダー・イメージが存在している。ブルッカーは、「自然」は「女性」と結びつけられ、特に西洋的な「産業社会における都市生活の(男性の)公的世界というモデルの対立物として認識されてきた」(ブルッカー、2003、P101)と説明している。

ここで、特に農業・農村と女性を明示的に結びつけて論じており、さらに上記のような二項対立イメージについても言及しているミース(1995)とヴェールホフ(1995)を取り上げることとする。

ミースは女性と植民地の関連について論じている。そこで、「女性」と「自然」との関係について以下のように言及されている。

それらは、『中心的な』生産関係すなわち資本—賃労働についての分析の外部に取り残され、そして特定の観点から『周辺の(マージナル)集団』、『辺境部』、『後進国』などのレッテルを貼られたのである。(ミース、1995、P16)

[女性と植民地の] どちらもいわゆる社会的生産の外部にあると定義され、『自然の領域』のなかに位置づけられる。(同、P19、大カッコは一宮による)

女性は、次の世代の賃金労働者を産み育てるだけでなく、力つき疎外された賃金労働者が人間性を回復する、いわば『自然』保持の場所として、家庭や私的領域を維持する存在なのである。(同、P20)

さらにそこで、「良い」女性は家庭の主婦であり、「悪い」女性は労働者や農民の女性として、後には植民地の人々にあてはめられた、としている(同、P 19-20)。「良い」=「文明化」された者、「悪い」=「野蛮」な者として、後者がより「自然に近い者」として、女性の中でも労働者や農民が、さらに劣位に置かれた、ということである。

また、ヴェールホフ(1995)は、農民(農業)と女性の経済的、政治的、社会的状況の類似点について論じ、それらが「自然に切り離しがたく『結びつけられて』いるように見え…(中略)…社会的に『自然化された』ものと見ることができる」(ヴェールホフ、1995、P76-77、傍点は原文ママ)としている。

このようにヴェールホフらは、資本主義社会において農民や農村、女性は「周辺の(マ

ージナル)」な存在とされてきたことや、その背後には上記のような「女性」と「自然」が結びつけられるステレオタイプイメージがあり、自然（天然資源）と同様に搾取されているのだ、と指摘して、そのようなあり方に対する批判を行っている²。

この「周縁的存在」という点から、女性と農業・農村はイメージの上で結びつけられやすいのだと考えられる。

2-2. 危機的状況における周辺化されたものの動員

次に、日本の女性イメージについて見てみる。平野（1984）は、日本独特の女性観として、「男尊女卑」と「家庭生活者」としての女性観の二つを挙げている。前者について、欧米文化における男性優位・女性劣位の二項対立的観念が、「フロイトやユングの精神分析を通じて、また西欧諸国の文学を媒体として」日本の女性観に影響を及ぼしているが、仏教や儒教のような「外国文化の伝播のたびに日本文化の中に堆積し、文化的・精神的遺産として伝承強化されてきた」男尊女卑観を「再認識させたにすぎなかった」としている（平野、1984、P4-5）。後者は、家庭における「主婦」「母親」像に象徴されるという。

近代以降「良妻賢母」像が作られていくが、「母」に力点があり、戦時下においてはそれが「国家的母性」に変化していくことを、中畠（1984）が指摘している。

女は家にあり家を支えるべきであるという、それまでの良妻賢母主義の位置づけはゆらぎ、国家社会を直接に支える者として、第一線における役割を分担し、女性も戦をになうこととなった。（中畠、1984、P237）

太平洋戦争突入後の総動員体制下では、女性に対して労働力と人的資源の再生産という要求が向けられていく。

この時期の女性イメージについて、若桑（1995→2000）を参照する。若桑は、太平洋戦争時の雑誌の画像や記述について分析しており、その特徴として「母性」にもとづく「やさしさ」「強さ」の強調があるとしている。その中で、銃後を守る女性の役割として、人的資源だけでなく第一次産業の「増産」を挙げている（若桑、1995→2000、P125-126）。それを端的に示す図像が図1であり、中心に人的資源の再生産、その周囲に農林漁業・鉱業が配置され、ここにも前節で見たような「女性」と「自然」の結びつきが見て取れる。

若桑は、「ここでのキーワードは、『天然資源』と『人的資源』であって、女性は天然資源の確保・生産の労働力であると同時に、いっそう中心的なその役割として子供を産出する肥沃な『自然』であることがよくわかるようになっている。」（同、P144）というように、

² 中道（1995）は、さらに資本主義において農業者は男女の区別なく労働搾取がなされており、さらに女性は家事労働を行うことで二重に搾取されていると指摘している。

「女性」と「自然」のイメージの結びつきがあると論じている。



図1
「銃後の婦人」(昭和14年6月号、
P27)の絵解き図
(若桑、2000、P143)

若桑は、さらにヨーロッパの戦時下女性の研究を参照しながら、危機的状況における「周边的存在」の動員についても論じている。それまでは公的な場での発言や社会的立場を抑制されてきた女性たちが、戦争という危機的状況にあって有用な労働力として動員され、あるいはプロパガンダのための女性オピニオン・リーダーとしてにわかに表舞台に立たされたこと、そしてその状況が去った後に簡単に切り捨てられることへの危惧を述べている。

2-3. 農政における「女性」

ここでは次小節の農村女性研究に触れる前に、農政中での「女性」の扱い、位置づけについて整理しておく。

戦後改革の中で、農政においてもその一環として、1948年に設置された生活改善課による生活改善普及事業がすすめられ、「農家婦人の地位向上」と「農村民主化」とが目指された。市田は、生活改善課は「女性の地位向上」によって「生活経営の合理化」を図ろうと考えていたが、これは「当時の農林省においては、全く異質な考え方であった」(市田、1995、

P115) と、あくまで一部局の取り組みとして、決して農政全体の動きではなかったとしている。その後、高度成長期には農家と非農家の生活水準格差が問題とされ、「農家の主婦達の余暇の少なさ」、過重労働にも言及されたが、女性の地位向上は前面に出なかった。

これが、積極的な農村女性への権利付与という方向へ転換するのは、1975年の国際婦人年以降である。1977年、婦人問題企画推進本部発表の「国内行動計画」に基づき、農林省も「生活改善課が従来の実績を生かして、農山漁村の女性のための政策を引き続き実施していくことになった」（市田、1995、P130）。ここでようやく農家女性の地位向上は省レベルでの政策課題となるのである。

1983年、「農村女性の地位向上」が、翌84年に「農村地域の活性化」が、政策課題として白書の項目に登場する（秋津、1996）。これに類する課題は上述のように過去にも見られるが、はっきりと『白書』の独立項目として表れたことが重要である。先の生活改善運動のように一部署による施策という位置づけではなく、農政全体の方針となったことが明示されたのである。その後、1989年には農村活性化の章の中に「農家婦人の生活行動と役割」が組み込まれ、農村活性化つまり地域振興において、高齢者と並んで女性が重要であることが打ち出される。

1992年に公表された、農政全体の方針を示す「新しい食料・農業・農村政策の方向」でも「女性の役割の明確化」が盛り込まれた。その直後には、農山漁村の女性に関する中長期ビジョンとして『新しい農山漁村の女性 二〇〇一年に向けて』という報告書が出ている。その冒頭部には、以下のような文言がある。

農山漁村の優れた特性や地域の個性を活かした農林水産業の確立と活力ある地域社会の形成を目指す…（中略）…取り組みを進めていく上で、女性に対する期待が高まっている。何故なら、女性は、人口の半数を占め、健康やゆとりを重視すること、子供たちのためにより良い環境を作ること等、経済合理性のみに支配されない生命重視の考え方である『生命の視点』をより強く持っているからである（女性に関するビジョン研究会、1992、P4）

このビジョンでは、まず、目指そうとする女性の姿を「自分の生き方を自由に選択し、自分の人生を自身で設計し、その結果、自信と充実感をもって暮らしている姿」とし、その実現のために必要なこととして「農山漁村型ライフスタイルの確立」を提唱している。その理由が、以下のように説明されている。

これがないと、女性が勝手に自分の生き方を描いて行動していくといったことにもなりかねない。また、例えば、男性並みになれば女性が幸せになるかといえば、経済中

心社会に対する反省からもそれはよくない。やはり男性と女性が協力して、何か違ったものを築き上げていくようなことを描いていきたい。[中略] これは恵まれた自然、人間的な温かみ、ゆとり、といったものをもった暮らし方のことである。(大島、1993、P21)

この中長期ビジョンについて、市田（1995）は、「農林水産業に携わる女性に『職業人』として『雇用労働者並みの』あるいは「男性なみの」評価や権利を与えようという側面」と、農山漁村型ライフスタイルを「『「生活の視点」をより強く持っている』女性を通して実現しようという面」という、相異なる側面を持っている³と指摘して、そのようなジェンダー観の形成過程について探っている（市田、1995、P122）。

このように、農政については早い時期から女性問題対策が提唱されていたが、その位置づけが、「虐げられている女性たちの地位向上」のために認めるといものから、積極的に参画してもらわなければならない、というものによって変わってきている。

これは、まずは日本社会において相対的縮小産業として他産業に比して危機的であるとされた農業に（第1章で挙げた熊谷の指摘がこれに当たる）、さらにその母体である農村地域の活性化において、それまで外部的な存在であった女性が動員されたといっている。

2-4. 農村女性のステレオタイプに関する研究

これまで日本国内の農村のジェンダーについては農村女性⁴研究のなかで行われてきたが、表象（イメージ）について扱ったものはほとんどない。

数少ない農村女性のステレオタイプイメージに関する研究として、渡辺めぐみ（2009）の研究がある。渡辺は、農業労働の中に「女性向きの労働」とされる労働があることに着目し、それは体力的な男女差、「機械が苦手」、「補助的」、「細かい」仕事などのイメージで語られるが、実際にはそれが決して体力的なものからではなく女性の方が身体的に重労働を担っていることを実証した。この語りに見られるように、実際に農家であっても、その

³ 前者は「権利の平等を求める近代主義的思想、リベラルフェミニズム」、後者は「命を育み自然と共生する『女性原理』が、自然を破壊し産業を発達させた『男性原理』とは別に存在し、その女性原理こそが近代化、産業化の限界を超えることを可能にするという脱（あるいは反）近代主義的思想、エコロジカルフェミニズムに分類」される（市田、1995、P122）。

⁴ 「農村女性」「農村男性」というカテゴリー化自体が、そもそも妥当なものかどうか、乱暴だということもあるが、やはりそうしてこくることができるということが、ステレオタイプの存在を示しているといえるだろう。「ここで、素朴ではあるが思い出しておきたいのは、私たちが個別具体的にどのような性質をもつかということとは別に、〈男〉や〈女〉というカテゴリーはそんざいしているということだ」（飯田、2001、P92）

認識の中にはやはり世間一般に流通するイメージが強力に作用しているのである。

渡辺は、農業における『男性／女性向きの仕事』という性別役割分業が、ジェンダーのイメージから『作られている』ことを実証し、そして、性別役割分業が形成される過程を、体系的に解明（渡辺、2005、P5）することを主目的としているが、他に「農業・農村に対するステレオタイプなイメージが存在していることへの問題提起」（同、P6）も挙げている。そこで、研究者・行政の「配偶者問題」認識から読み取れるマイナスのステレオタイプイメージの分析と、農家へのインタビューに表れる労働観の実証分析を行って、実際にステレオタイプイメージが強化されていることを明らかにした上で、「農村女性の称揚」というプラスイメージへの転換が持つ問題についても言及している。

農業・農村のマイナスイメージについては、以下のように述べている。

[先行研究では] 重い農業労働に対する女性の忌避が「配偶者問題」の原因であるという調査結果が出ていた。しかし、別の調査では、従来から「農家に嫁が来ないのは」「規模の大きい農家では農作業が大変だからといった見方が広く存在している」が、「耕地規模と縁事転入との関連」を見ると「耕地規模が大きい農家ほど嫁がきている傾向」が明らかになった。（同、P54、大カッコ内および下線部は一宮による）

農村社会の人間関係の煩わしさについては、今もしばしば語られる。例えば坂本洋子が、「今日人の動きが少しでも変わっていると明日にはウワサが広がる。噂によって他人の家の幸せや自由を葬ってしまうとか、なし崩しにしてしまうという暗黙のネットワークがあります」（日本農業研究所、一九九〇、一一八頁）と述べる。こうした言説は、単なる個人的な実感なのか、それとも、フィールドワーク的な、ある程度学術的な手順を踏んでのことなのかはわからない。（同、P56、下線部は一宮による）

渡辺は、学術研究や行政の施策などの問題分析と提言に、「結果的にステレオタイプのマイナスイメージが入り込んでしまったのであろう」（同、P54）と述べている。もちろん、その指摘はもっともなもので、渡辺の分析も大変興味深いものであるが、そのステレオタイプは「前提」として「存在している」（上掲書、P57）と述べており、筆者自身はその前提に基づいて分析している。

また、上記のプラスイメージへの転換が持つ問題については、以下のように述べている。

農村のマイナスイメージを転換するための戦略として一定の評価はできる。だがこのような賞賛は時に、女性の『感性』『母性』が必要だというような、ジェンダーバイアスを帯びたものになりやすい。（同、P188）

[性別役割分業を伴う家族農業経営] システムに適応し、ジェンダー化の戦略という

苦肉の策で『やりがい』を見出している女性の姿に対して、『いきいきと元気に農作業に取り組んでいる』という評価を下すとすれば、またしてもジェンダーの格差は再生産され、「みえない」まま維持され続けることになる」(同、P189、大カッコは一宮)

渡辺の指摘したステレオタイプ自体の分析は、いまだ充分には行われていない⁵。

上記の引用部分からも、すでに日本社会で共有されるステレオタイプがあり、それは研究や行政の影響も受けるが、もっとも広く日常的に触れ、影響力が強いのはポピュラーカルチャーのなかのイメージであろう。

次節では、ポピュラーカルチャーにおけるステレオタイプの分析を行う。

⁵ 詳しくは一宮 (2008) を参照。

3. マンガ作品における農村女性

3-1. 農業・農村マンガについて

本節および次節では、マンガを対象として農村女性のイメージに関する分析を行う。ポピュラーカルチャーのなかで、TV番組や映画・小説は素材の量やオーディエンスの数に勝っているが、マンガを取り上げる理由として、描画や物語における極端なデフォルメ（カリカチュアライズ）によってステレオタイプの要素が端的に示される点を挙げておきたい。

一宮（2008）では、農業・農村を主題とするマンガの分析を行った。マンガ作品についての包括的なデータベースは作成されておらず、著名なマンガ作品について網羅した文献である竹内・米沢・ヤマダ編（2006）、呉（1999）などでは、農業・農村という視点から言及された作品は筆者既読の作品以外ほとんど見られなかった。06年10月までにインターネット上での検索サイト Google および通販サイト Amazon で「農」「農業」「農村」「田園」と「マンガ」「漫画」「まんが」をキーワードとして検索した⁶。ヒットした作品のうち、①全編または連載作品の章単位で発表当時における同時代の農業・農村を中心的題材としており、②フィクションであり、③一般マンガ雑誌に掲載され、④2007年1月までに内容確認が可能であった作品を対象とした⁷。表1では、上記の作品群に、本報告書で取り上げる作品（作品名に※）を加え、若干説明を追加している。

3-2. 70年代の農村女性のステレオタイプ～農家の嫁の条件⁸

近年の作品を取り上げる前に、比較対象として70年代の作品における農村女性のステレオタイプを見てみることにする。取り上げるのは、70年代から始まった矢口高雄『おらが村』シリーズ⁹で、舞台は一貫して、作者の出身地である秋田県旧増田町（現横手市、作者幼少時は西成瀬村）である。この作品以前には農家主人公のマンガはなく、農業・農村マンガとしては嚆矢と言える作品である。

農業近代化の波にさらされる過疎の農村での生活と美しく過酷な自然が描かれているが、第一作の主人公は50代の農家男性・高山政太郎と20代の長男・政信で、後半部では政信の恋愛と結婚問題が主題となっている。作者のあとがきなどから、当時は農家主人公、農

⁶ Amazon では、本文や目次の試し読みページがある場合にはそのテキストも検索されるため、Google でヒットしなかった作品も上がってくるため、両方の検索を行った。

⁷ ①に関し、オカルト・ファンタジー作品は民俗学的題材を扱っており興味深いのが、分析が煩雑になるため今回は除外した。③に関して『新・おらが村』はマンガ雑誌掲載ではないが、シリーズ作品であるため表1に含めている。

⁸ 本節は Ichinomiya（2009）を日本語訳および加筆したものである。

⁹ 『おらが村』（双葉社『Weekly 漫画アクション』にて1975～76年連載）、『ふるさと』（同、1983～85年連載）、『新・おらが村』（家の光協会『地上』にて1988～92年連載）。

表1 1970年代以降発表の農業・農村マンガ								
作品名	作者	出版社	掲載誌	分類	開始	終了	単行本	主題・主人公・モデル地など
おらが村	矢口高雄	双葉社	アクション	青年	1975	1976	全3巻 (B6判)	過疎、農業問題(農家男性、戸主と後継者)、秋田県旧増田町
美味しんぼ	雁屋哲 花咲アキラ	小学館	スピリッツ	青年	1983	連載中	105巻～ (新書判)	食(新聞記者・男性)、文庫版
ふるさと	矢口高雄	双葉社	アクション	青年	1983	1985	全8巻 (文庫)	「おらが村」シリーズ2作目、Uターン就農者(小学生の息子)、秋田県旧増田町
第一次産業シリーズ	川原泉	白泉社	花とゆめ	少女	1987	-	全1巻 (新書判)	職業としての農業(農家・女性)、読み切り連作3本、文庫全1巻、鹿児島・北海道・山梨。
遠くにおいて	近藤ようこ	小学館	ビッグコミック	青年	1987	1990	全1巻 (文庫)	家族問題・Uターン(教員・女性)、新潟
夏子の酒	尾瀬あきら	講談社	モーニング	青年	1988	1991	全12巻 (B5判)	日本酒・有機農業(酒蔵専務・女性)文庫全6巻、新潟
新・おらが村	矢口高雄	中央公論社	地上(家の光協会)	青年	1988	1992	全4巻 (文庫)	「おらが村」シリーズ3作目(Uターン者の息子)、秋田県旧増田町
都立ホロホロ農業高校	白銀章	秋田書店	ヤングチャンピオン	青年	1988	1989	全5巻 (B5判)	学園・番長もの(小規模農家の息子)、東京?
ぼくの村の話	尾瀬あきら	講談社	モーニング	青年	1992	1993	全7巻 (B6判)	空港建設反対運動(三里塚がモデル)、開発と農業(農家・少年)
風の宿	小山田いく	秋田書店	週刊少年チャンピオン	少年	1993	1995	全8巻 (新書判)	長野県の農村生活、Uターン(獣医師・男性)
牛のおっぱい	菅原雅雪	講談社	モーニング	青年	1993	1996	全5巻 (B6判)	北海道の酪農家(酪農家・男性)
じゃじゃ馬☆グルーミンUP	ゆうきまさみ	小学館	週刊少年サンデー	少年	1994	2000	全26巻 (新書判)	北海道の競走馬生産農家(男子高校生→牧場従業員)文庫全14巻
SEED	本庄敬	集英社	ビジネスジャンプ	青年	1996	2002	全10巻 (B6判)	国際農業問題(農業コンサルタント・男性)
QUEEN BEE	小山田いく	秋田書店	週刊少年チャンピオン	少年	1999	-	全1巻 (新書判)	転地養蜂、職業ものに近い昆虫マンガ(養蜂農家の娘・小学生)
おせん	きくち正太	講談社	イブニング	青年	1999	続編連載中	全16巻 (B6判)	食、秋田県の稲作農家が登場する回など(料亭女将)、続編は既刊3巻。
GREEN 農家のヨメになりたい	二ノ宮知子	講談社	Kiss Carnival	YL	1999	2001	全4巻 (新書版)	恋愛・農業従事(非農家・女性)、埼玉県秩父
薔薇姫	西炯子	小学館	プチフラワー	YL	2001	2001	全1巻 (B6版)	恋愛(園芸農家の息子と同級生)
あの山越えて	夢路行	秋田書店	フォアミセス	YL	2002	連載中	17巻～ (B6判)	長崎県の農村生活(教員・女性、夫がUターン就農)
地の子(つちのこ)	毛利甚八 幅地英明	集英社	OH! スーパージャンプ	青年	2002	2003	全3巻 (B6判)	農業問題、取材協力は大分県の農業高校(文部官僚・男性)
マニマニ	宇仁田ゆみ	詳伝社	フィールヤング	YL	2002	2002	全1巻 (A5判)	全6話中1・6話がUターン女性の話、三重県農村部(農家の娘)
リトル・フォレスト	五十嵐大介	講談社	アフタヌーン	青年	2002	2005	全2巻 (A5判)	食・農村生活・スローライフ(自給的農家・女性)
STAYシリーズ	西炯子	小学館	フラワーズ	YL	2003	2006	全7巻 (B6判)	恋愛、鹿児島県指宿市周辺を舞台とした連作(中・高校生)
COME!(コメ)	日高トミ子 松本タカ	講談社	ヤングマガジン	青年	2004	2005	全4巻 (B6判)	農業問題・米作り、青森県(農家・男性)
もやしもん	石川雅之	講談社	イブニング	青年	2005	連載中	9巻～ (B6判)	農業大学、食、職業ものに近い(農業大学生・麴屋の息子)
現在官僚系もふ	鍋田吉郎	小学館	スピリッツ	青年	2005	2006	全8巻 (B6判)	官僚の職業もの、第3～4巻BSE問題、畜産農家登場(若手官僚)
酒ラボ	宇仁田ゆみ	講談社	KANSAI一週間	青年	2005	2005	全1巻 (B6判)	農業大学、学生生活に重点、(農業大学生)
※雨無村役場産業課兼観光係	岩本ナオ	小学館	Flowers 増刊 凜花	YL	2007	2010	全3巻 (新書判)	恋愛(同性愛含む)、地域おこし(Uターンした公務員)。岡山県岡山市旧灘崎町
※かむろば村へ	いがらしみきお	小学館	ビッグコミック	青年	2007	2008	全4巻 (A5判)	田舎での生活と政治(金アレルギーの元サラリーマン男性。若干オカルト要素あり)

注)筆者作成。「分類」は雑誌の設定する読者層に依拠し、大きく男性/女性向けで分け、その中でローティーン以上口対象を「少年/少女」、ハイティーン以上対象を「青年/YL」(YLはヤングレディーズコミックの略)としている。

村が舞台のマンガはほとんどなかったという。続編である第二・三作では、政信の同級生で隣人である、Uターン農家の男性・杉村良平とその長男・太平が主人公となる。

この作品には多くの女性が登場するが、ここではその女性たちに着目する。

作品に登場する 18 名の女性と、群衆として描かれる村の女性たちについて、そのキャラクター造形と物語中の役割について、グルーピングを行った (図 1)。

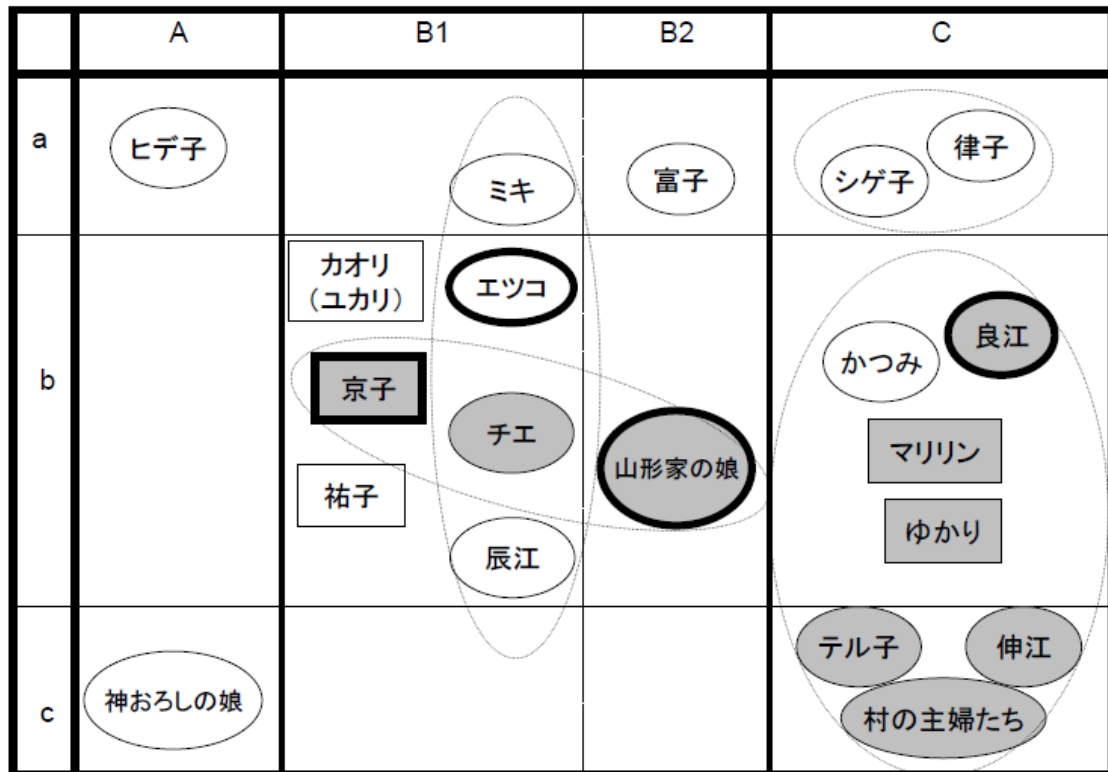


図 1 キャラクター造形と役割による女性たちのグルーピング

(円形は村出身、四角は東京または外国出身、太線は死亡、網かけは出産経験者)

造形による分類のポイントは、以下のパーツによる「美人」のコード¹⁰である。

- ①顔：目（まつ毛）、鼻、口（歯）、輪郭、化粧
- ②髪：色、髪形（パーマのあるなし）
- ③体型
- ④服装

¹⁰ 本節の元となったワークショップでの報告では、「美」とは決して外見（造形）だけではなく、「内面的な美」も考慮されるべきとの指摘を受けた。その内面、つまりキャラクターの性格や振舞いについては、極力、村への帰属の中で触れるようにした。しかし、「内面的な美」がどのようなものであるかは、時代・場所ごとの文化によって異なる。よって、ここでの「美人」のコードはあくまで造形上のものとした。「村」においてその内面的な「美」がどういう性質のものとしてされているかは、結論から推測できるだろう。

このポイントから、3つのグループに分けられる（図1の縦軸）。

グループ a：完全に美人コードを満たす

グループ b：一つまたは複数のコードが満たされていない

グループ c：非「美人」

次に物語中の役割だが、村への帰属、つまり農家の嫁として村の中で生きていくことができるか、という点から分類した（図1の横軸）。以下、各登場人物の説明を行う。

グループ A：結婚対象外

ヒデ子：器量も気立ても申し分ないが、弟が障害者であるため、「マキ（血筋）が悪い」
神おろし（巫女）の娘：政信に持ちこまれた見合いの相手。「ちょっくら太り気味だがおっとりして丈夫そう」だが、「家の格に合わない」と母親が拒否。



左：図2 ヒデ子（『おらが村』下巻 P313）



左：図3 神おろしの娘（『おらが村』下巻、P67）

グループ B：物語内で「村」から排除される

B1：東京在住、または上京経験者

ミキ：村の隣町出身のホステス。杉村と性交渉を持つが、杉村の元妻登場後は物語に登場しない。

エツコ：村出身で上京後ホステスをしていたが、男にだまされて失意の帰郷。その際吹雪に巻き込まれ死亡。

チェ：離婚して東京から子連れで出戻り。村には居場所がなく、隣町でホステスに。

カオリ：チェの娘。東京生まれ。太平の初恋の少女に酷似。隣町に再度転校。

京子：杉村の元妻。離婚して東京に残り、他の男と暮らしていた。作中、エキノコックスに罹患して死亡。良平は彼女の病気を知る前に、京子と子供たちがキツネに化けて彼を捨てる夢を見ている。加えて、彼女が死の床で全身を痙攣させているときの様子は、つり目でキツネのように描かれている。

祐子：杉村の東京での部下。主人公を追いかけてくるが、退散する。

辰江：良江（グループ C）の妹。上京して焼鳥屋をしている。姉の葬儀で心ない発言をする冷たい人間として描かれる。B2の山形家の娘と似た造形である。

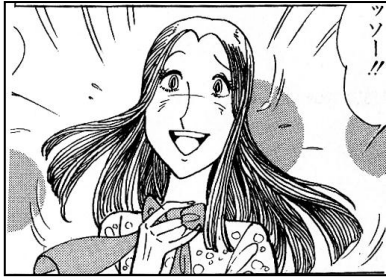


図4 ミキ（『ふるさと』2巻、P168）



図5 エツ子（『おらが村』下巻 P255）

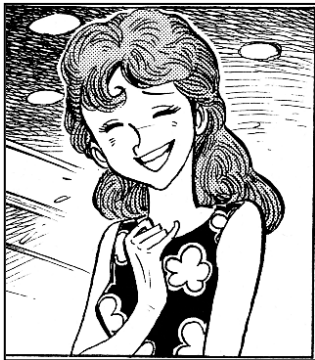


図6 チェ

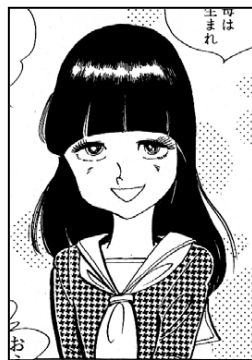


図7 かおり、



図8 京子（右）

（それぞれ『ふるさと』8巻 P67、7巻 P189、6巻 P160）



図9 祐子（『ふるさと』1巻、P288）



図10 辰江（『ふるさと』4巻、P38）

B2：結婚により他出

富子：村の娘。「嫁には行かないが結婚はしたい」と見合いを断わり、町のサラリーマン男性と結婚する予定。

山形家の娘：婿取りの家つき娘。まじめな夫に対し、器量を鼻にかけて全く働かない。

それに輪をかけた母親と共に夫を疎んじていたが、母親が夫に対し傷害事件を

起こし、家裁の判決で母と共に家から追い出される。他の村で再婚後、病死。



図 11 富子 (『おらが村』上巻、P199)

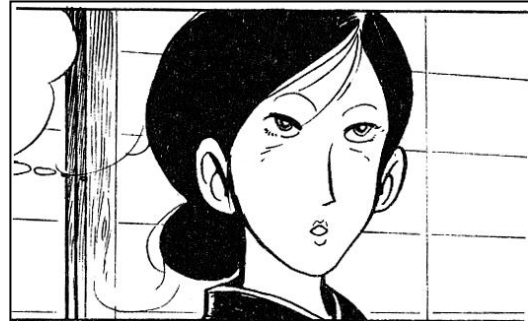


図 12 山形家の娘 (『おらが村』上巻、P384)

グループ C : 「村」の内部。すでに農家の嫁であるか、その予定。

律子 : 政信の恋人。一人娘で婿取りをすることになっており、結局別れることになる。

別れた直後に体調を崩し、生死の境をさまよう。これは、主人公の嫁としてふさわしくない、ということの暗示であるにとらえられる。回復後、長かった髪を切り、決別を明確にしている。彼女はその後、主人公と対面するが、視線を交わしただけでその後は登場しない。作中では描かれていないが、その後婿を取ることになるのであろう。

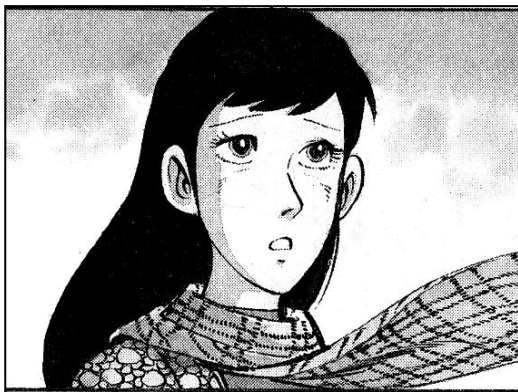


図 12 律子 (左は主人公との交際中、右は決別後、『おらが村』下巻 P172・209)

シゲ子 : 別の村に嫁いだが、姑との折り合いが悪く、田植時に家出して帰郷。父親は激怒。田植え後のヨデ (宴会) でのふるまいの餅つきを手伝うことで、労働可能性が担保され、婚家に戻っていく。

良江 : 太平の親友の母。作中、末期がんで死亡している。



上左：図 13 シゲ子（『おらが村』上巻、P370）



上中央：図 14 良江（『ふるさと』4巻、P34）

図 15 かつみ（上右『ふるさと』1巻、P16）

下『おらが村』上巻、P199）



かつみ：政信の妹。第一作では農家とは結婚しないと宣言していたが、第二作で杉村と結婚。農作業をしている場面も多く、夫のサポートをしている。

マリリン：第三作で登場。22歳で母国では小学校教員だったが、39歳の村の独身男性と結婚する。この見合い結婚は架空の「国際結婚推進協会」によるもの（現実社会でも同様の組織があり、中には地方自治体が行っていた例もある）。彼女の動機は経済的なもので、愛されたから日本に来たのではなく、日本に来るために愛されなければならなかった、と言っている。しかし、夫や舅とほうまくやっており、妊娠する。婦人会の共同作業を通じて、地域社会にも溶け込んでいく。彼女が野良仕事をしている場面はないが、この共同作業のシーンが彼女の労働能力を示している。

ゆかり：政信の出稼ぎ先、東京の社長令嬢で短大卒。政信に恋しており、両親の許しを得て高山家を訪問。政信の母は最初反対するが、彼女が化粧も薄く、かつみ

に助けられて方言やしきたりを学び、労働もできることを証明した後、認められて結婚する。第二作では子供もできる。



図 16 マリリン (『新・おらが村』2巻、P4)



図 17 ゆかり (『おらが村』下巻、P353)

テル子：10代後半の村の娘。婚前交渉で妊娠し、村中の噂になっている。兄が後天的障害を苦しんで離郷したため、婿取りという形で交際相手と結婚することになる。

伸江：政太郎の妻で50歳、すでに子育てを終えている。しっかり者が気が強い。彼女は若い頃は美人だったというが、今は中年太りでしわだらけ。主婦は「カマドが自由になる身」¹¹とよばれていて、これは姑から家の切り盛りを任されたことを示す。彼女の夫は彼女を「ドテーッと太って」いて、「神社の大杉みたいで抱き回せない」「馬みたいなケツ」とからかいのネタにしている¹²。その一方で、彼女が風邪で寝込むと全く家事ができないという場面もある。彼女のデザインは、彼女が労働・出産可能であることを示す典型である。



図 18 テル子 (『おらが村』上巻、P260)

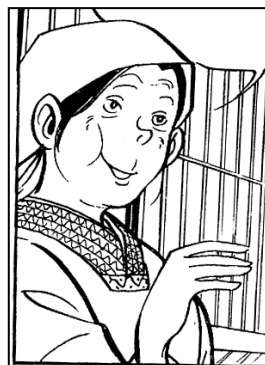


図 19 伸江 (『おらが村』上巻、P16)

¹¹ 『おらが村』上巻、P62。

¹² 同上、P63。

図1のグルーピングの中には、さらに以下のようないくつかの特徴が見られる。

- ・グループ a には妊娠、出産経験者がいない
- ・作中での死亡者はグループ b にしかいない
- ・離婚者は bB1 にしかいない
- ・水商売経験者は B1 にしかいない
- ・グループ C では全員農家の妻かその予定だが、aC のシゲ子は儀礼の手伝い、律子（後述）は失恋後に髪を切ることによって農家の嫁たることを保障されている。
- ・bC ではかつみ（出産経験なし）とヨシ江（死亡）が例外。ただしかつみは出産可能性はあり、ヨシ江の死、言い換えれば正勝の母親喪失は主人公の太平の母親喪失との相似形、補強エピソードとして描かれている。
- ・結局残る cC だけが農家の妻の絶対安全領域ということになる。

このシリーズでは、出産・育児と労働可能な身体を持つ、つまり化粧っ気がなく頑健な女性が望ましい農家の嫁とその予備軍であるというステレオタイプが示されている。農家の嫁についての慣用句「乳役兼用無角牛」（子育てと労働力としてのみ期待される嫁）そのものであり、村にふさわしい存在として、そこで生きることを許されるのである。

次節では、この作品を基点として、30年後に描かれた作品について取り上げて、農村女性の設定や描写がどのように変化したか、そして2000年代以降の現在における農業・農村との親和性について見ていくことにする。

4. 『あの山越えて』の設定および描写

4-1. 作品概要と主なキャラクター設定

ここでは、2000年代以降に発表された作品『あの山越えて』を取り上げ、前節の70代作品と比較しつつ、近年の農村女性のイメージを見ていく。

秋田書店『for Mrs.』（フォアミセス）2002年6月号連載開始、既刊17巻（2010年時点、99話まで収録）である。この作品を取り上げたのは、既婚女性をターゲットとした一般マンガ誌において、ドラマ化された他作品と並んで看板作品として長期連載中であることから、読者からかなりの支持を得ている（受け入れられている）と推測されるためである。エピソード数も多いため、主人公以外にも女性たちが多数登場することも理由である。

夫のUターン就農についてきた小学校教員の田舎暮らしを描き、キャッチフレーズは「心癒されるカントリーライフ物語」である。舞台は作中では明言されていないが、おそらく作者の出身地の長崎（五島列島）がモデルになっている。

主なテーマは、生活知識、習慣・風習などの田舎暮らし、家族、夫婦、嫁姑（舅）、ご近所・親戚づきあいなどの人間関係、主人公だけでなく周囲の人物の恋愛・結婚（離婚・再婚）・出産・育児と、教員としての物語が織り交ぜられている。以下、本報告書で取り上げる主な登場人物たちについて説明する。また、女性については図1で示した「おらが村」シリーズと同様のグルーピングで大凡どのグループに当たるかを示しておく。

（1）主人公とその家族

①大石君子（おおいしきみこ）：bB1

主人公、連載開始時20代後半、小学校教諭。東京の下町で生まれ育つ。東京で結婚したが、夫がUターンを希望し、2年の準備期間を経て夫の実家に近い小学校へ赴任。転勤後2カ月の時点から物語は始まる。実家には両親、弟がいる。周りからは「頼りない」という評価が多い。夫婦仲は「永遠の新婚」と言われるほど良いが、子供はない。

②大石歩（おおいしすすむ）

主人公の夫。長崎県の農家の次男。大学進学にともない上京、そのまま就職し、サラリーマンとなった。新婚4カ月で父の大病を期に自らの農業志望に気付き、就農したいと告白・準備期間を経てUターンした。妻からは「慎重」（母曰く「ぐずぐずしている」）といわれている。

③大石和代（おおいしかずよ）：bC

歩の母。山を越えた町から嫁いできたが、姑との折り合いは悪かった。長男の嫁とは気が合わないが、主人公とは仲が良い。働き者で気配りができ、頼りない次男夫婦をしばしばフォローしている。婦人会などでしばしば嫁に甘すぎると指摘されているが、「わざ

わざ『助けさせてくれている』のだと答えている。農業はずっと嫌いだったが、歩が君子を連れて帰ってきたことが嬉しく、まりなが就農を希望したことで「いい仕事」だと思ふように。

④大石一明（おおいしかずあき）

歩の父。寡黙で穏やかな性格。本人は農業が好きだが、子供たちに農業を継がせるつもりはなかった。歩に続き、孫のまりなが就農したことを喜んでいる。

（2）女性新規就農者たち

①大石まりな：bB1

大石家の長男・一郎の一人娘。父の溺愛・名門女子中学での窮屈な生活、両親の不仲によりアレルギーを起こし、祖父母の家に身を寄せた（両親はその後、同じマンション内で別居している）。中卒で就農、年下の君子の元教え子と恋愛関係にある。歩が仲間たちと作った農業生産法人のメンバーとなった。

②数住花枝（すずみはなえ）：bB1

東京・山の手の弁護士の娘。短大英文科を卒業後、OLだったが職場の女性たちになじめず、君子の同級生の恩師の紹介で、農業研修に来る。そのまま町に移住、歩の弟分の吉田広志と交際・結婚、一男をもうける。歩が仲間たちと作った農業生産法人では経理を担当する。

③飯田百合子（いいだゆりこ）：aB1

山の牧場の後継者。手術前のMtoF。本名は修三。東京では水商売をしていたがずっと実家に仕送りをしており、それで手術代がたまらない。父がまりなを養女にして牧場を継がせようとしているというわさを聞いて、急遽戻ってきた。母親は納得した一方で父はなかなか受け入れられなかったが何とか家に戻ることを認める。その後、牧場を手伝っており、町主催のお見合いパーティでは盛り上げ役として呼ばれている。

（3）移住者たち

①三峰夫妻

夫は55歳、横浜に妻を置いて3年半前に単身で移住。廃校になった小学校を改装して住居としている。元は食品関係の仕事についていたが、早期退職して移住、有機農業を始めた。当初は地元の人々には「変わり者」と呼ばれていたが、現在では地域に馴染んでいる。四国の農村部出身だがIターンした理由は、教理の親戚と妻や自分との折り合いが悪かったためである。作中、田舎にはなじめまいと置いてきた妻が押し掛け、同居することになった。その後、妻（元フラダンスの講師で派手な容姿をしている:aに近いbB1）も地域には溶け込んでいる。

②高野夫妻：bB1

夫は人付き合いが苦手で、人間関係がこじれて体調を崩して会社を退職、夫婦で東京から移住した。妻は農業に従事し、町の直売所に品物を持ち込んでいる。結局、夫は田舎暮らしに馴染めず、東京に戻ってしまい、妻は残って一人で農業を続けることになった。

③田村夫妻：（造形はほとんど確認できないが bB1 か）

高野夫妻と同じ階に登場。夫婦と子供で移住してきたが、夫が農業を嫌って、妻の実家の方で商売を始めると云うことで転出した。

4-2. 主人公の家族関係～妻・嫁・教員として

この作品の主人公は、「農家の妻」「農家の嫁」さらに職業婦人として「教員」という立場を、時には失敗しつつも基本的には鼎立しており、周囲からも理想的な結婚生活を送る存在として見られていると描写されている。

前節でみた「農家の嫁」であることを要求される女性たちとは、この点でかなり異なっており、現在の状況¹³を反映した農村女性イメージが提供されていると言える。これより古い、二ノ宮知子の『GREEN 農家のヨメになりたい』¹⁴でも「農家の妻」「農家のヨメ」という立場は描かれ、夫とは別に自分はハーブ栽培に特化するというエピソードが出てきたが、それよりも一歩進めた形になっている。

しかし、上司や同僚、家族など、周囲の身近な人々からしばしば「頼りない」（図 20）、「おっちょこちょい」などと言われる主人公が、理想的な存在として居続けられるのは、実際には夫の母（姑）のサポートによる所が多い。主人公が勤務する小学校の教頭・竹山（図 20、2 コマ目右端の女性）の台詞で「大石先生が日々 仕事に打ち込めるのはおかあさまのお助けもあるからだ」と言われている（第 73 話）他、婦人会などでも話題にされるなど、周囲からの評価も、本人の自覚もある。それに対して姑は、「君子さんたら“がんばって”あたしに世話焼かしてくれるのよ」とフォローを入れている（第 78 話、図 21）。

家庭と職業の両立がかりうじて続けられるのは、夫の母がステレオタイプの農村女性労働（家事も農業もアンペイドワーク）に、さらに主人公の家事の一部を引き受けているからなのである。

この主人公は結婚 8 年目にして子供がなく、家事労働も完璧にはこなせていないのだが、農村での生活はむしろ成功している。その点では、前節でみたステレオタイプとは完全に異なっている。その代償は完全ステレオタイプの姑が引き受けているのであるが、嫁・姑

¹³ 例えば、田舎暮らしブームの中では「半農半 X」という半農半漁をもじったフレーズで、兼業が推奨されている。

¹⁴ 講談社『Kiss Carnival』にて 1999～2001 年連載。

関係は円満なものとして描かれている。

この作品では、『おらが村』では村から排除されていたタイプ（グループ B）の女性が他にも登場する。主人公の教え子の母で、離婚して、横浜から実家へ子連れで戻った女性である。化粧や服装が派手で、畑仕事を嫌い、家事も最低限しかしない。しかし、農家と再婚し、一女をもうける。その後も育児放棄して家出するなどの問題を起こしているが、それでも、結婚生活は続いている。また、前節（2）③の MtoF である飯田百合子は、東京では水商売をしており、かなり派手な服装なども見せており aB1 に属する。性的マイノリティであるという点で、かつてのステレオタイプイメージでは描かれることすらない存在だが、無事 U ターンし、地域社会にも受け入れられている描写がある。

彼女たちのような「おしゃれな女性」は、上記の『GREEN』でも登場している。作中、地元の青年と交際を始め、家業を継ぐ意思もあるようで、グループとしては『おらが村』では留保付きでかろうじて排除されなかった aC に当たるが、村に残ることが想定されている（ただし、まだ高校生であることから将来的な他出の可能性も否定できない）。

本作の中には、新しい女性イメージを提示されるとともに、このような過去のステレオタイプの継続が見られるのである。



図 20 「頼りない」とされる主人公
 (『あの山越えて』15 巻、P8)



図 21 姑によるフォロー
 (『あの山越えて』14 巻、P66)

4-3. 農業・農村と女性を結びつける要素

(1) 女性向きの労働

ここで、この作品に表れる農業労働のイメージを見てみる。例えば、除草作業の際に「女の方が辛抱強くこつこつやるから向いてると思うよ 男が勝てるのは力仕事くらいさ」(第66話、図22)という台詞がある。これは主人公の夫と離郷したその幼馴染の男性の会話である。

また、「女にはつらい仕事」(第33話、図23)という言葉も出てくる。これは畜産についての台詞だが、実は畜産農家が MtoF のトランスジェンダーの息子を受け入れる場面であり、注意して受け取る必要がある。それについては4-4節で触れることにする。



左：図22 「女の人の方が向いている」
『あの山越えて』12巻、P60



右：図23 「女にはつらい仕事」
『あの山越えて』6巻、P143

(2) 食の生産

作中、食事の支度をするのは、ほぼ女性である。主人公の舅は、姑の体調不良時に台所に立ったが、主人公の用意した粥を温めなおしただけであり、それでも姑は大きな変化として受け止めている(第56話)。主人公の夫のみ、初期は簡単な手伝いをする程度だったが、主人公が支度を出来ない時は作るようになっているという描写がある。

地域内の直売所でも、昔ながらのおやつや総菜など加工品を作っているのは「おばさん

グループ」である（第 87 話）。その解説の後、和代が「あたしもたまにお総菜作りの手伝いに行くけど みんな元気になった感じがするよ」というのに対し、歩が「お婆さんたちはいつも元気じゃないか」と続けている。その後、それとは対照的に「オジサン会」は集まっても酒を飲むぐらいだが、歩の家の鳥小屋はそのボランティアであつという間に出来たとあり、大工仕事は男性のものとして描かれている¹⁵。

「おふくろの味」による地域振興は、農村活性化の中では定番となっている。食の生産と女性が結びつくイメージは様々な所で見ることができ、マンガでも実に多くある。本作品以外でも、例えば尾瀬あきらの『夏子の酒』¹⁶では、先述のように女性主人公による有機農業導入と新しい酒造り、また著名な作品である雁屋哲（原作）・花咲アキラ（絵）の『美味しんぼ』¹⁷の中でも、特に 90 年代後半から始まった「日本全県味巡り」というシリーズで、郷土料理のうち、家庭料理の紹介はほぼ女性が、飲食店の料理、つまりプロフェッショナルによる料理は男性が紹介するという形になっている。五十嵐大介『リトル・フォレスト』¹⁸は、女性主人公によるスローフード・スローライフを描くものであり、岩本ナオの『雨無村役場産業課兼観光係』¹⁹では、女性による特産物開発、食品については女性、工芸品は男性という描写が見られる。食と女性の結びつきはかなり強烈なものであるといえる。

（3）女性の柔軟性・適応力

三点目として、環境変化に対する「女性」の柔軟性・適応力を挙げたい。例えば、活性化に関する研究・政策の中で「男性の気付かない発想」や、「女性」の感性（細やかさ、情緒）に基づく、集落や組織内での「コミュニケーション力」が良く挙げられる。マンガの中でもこれに対応する描写が見られる。80 年代の作品である『夏子の酒』なども、これが強調された作品である²⁰。

『あの山越えて』の中では、状況の変化に対して戸惑う舅に対して「変わらないことなんてありませんよ」という姑の台詞や（第 56 話、図 23）²¹、居住環境の変化に対する女性

¹⁵ 新規就農者の花枝は日曜大工が趣味だが、それはかなり特殊なものとして認識されると云う描写がある。

¹⁶ 講談社『モーニング』にて 1988～91 年連載。これは、伝統的な農村や酒造業に、女性という異物が入り込み、革新をもたらす物語である。

¹⁷ 小学館『ビッグコミック・スピリッツ』にて 1983 年から連載中。

¹⁸ 講談社『アフタヌーン』にて 2002～05 年連載。

¹⁹ 小学館『flowers 増刊 凜花』にて 2007～10 年連載。

²⁰ 農家ではない女性主人公が、村に有機農業を導入し、その感性や優れた嗅覚や味覚によって、新しい日本酒を造り出すというものである。

²¹ この後、第 76 話では主人公夫婦が第 1 話で得た新居（夫の幼馴染の家を譲り受けている）を失うエピソードがある。その時もダメージが大きいのは夫の方であった。作中では、一国一城の主がそれを失ったのだから、とされており、男性の方が家を持っているのだ、ととれるが、女性の方が状況変化に対して耐性があるともとれる。



105

左：図 23 「変わらないことなんてありませんよ」（『あの山越えて』 10 巻、P105）
 右：図 24 図太くなった妻（『あの山越えて』 15 巻、P166）



の「図太さ」という台詞がある（第 87 話、図 24）。この台詞は、農村へ I ターンした夫婦たちを描くエピソードで出てくる。妻の方は地元の住人のアドバイスを受けながら農業をし、加工品を直売所に持ち込むなどしているが、夫は人付き合いが苦手だという設定があり、物語上は「畑を耕すとミミズを切ってしまう イモ虫や毛虫を捕るのも 車で小さな生きものを轢いてしまうのもうんざりだ」という台詞を残して、妻を置き去りにして去ってしまう。その直後の場面で、妻は主人公に、移住後に家計のために丸ごと購入した鶏を捌いて「…怖い 君は図太くなってしまったなあ」と言われたこと、「できたごはんは食べるくせに、やさしくせに あたしの代わりにはやっってはくれないんだから」と内心を吐露する²²。

この回ではほかの夫婦も登場するが、妻たちが農業や地域のコミュニティに溶け込んで

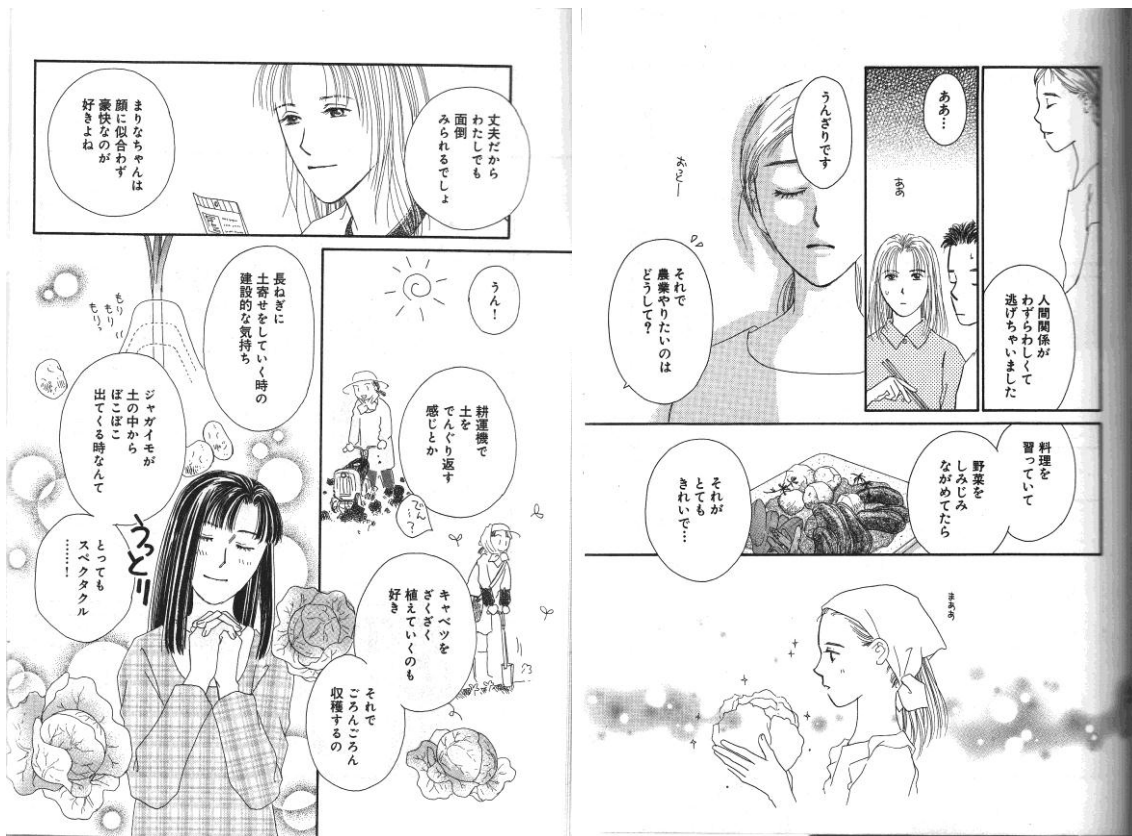
²² これに続く、主人公のモノローグは「結局のところ 女は図太くなるものなのかもしれない 生活のために 誰かのために 男が外で 7 人の敵と戦っている間に」とあり、ここにも性別役割が反映されているのが興味深い。

いるのに対し、夫たちが農業や農村に馴染めず、結局村から出て行ってしまおうというストーリーになっている。

これらを見ると、環境の変化に対する女性の柔軟性や適応力が「ずぶとさ」という言葉になって表現されており、女性の方が農業や農村に対してなじみやすいのだと読むことができる。

例外として妻を置いて移住した三峰の夫がいるが、彼についてはもともと食品関係の仕事をしており、食品（農産物）についてこだわりがある、という点で、先にあげた「女性」の領域である食の生産に携わっていたという点がそれを保障していると読めるのである。

このほか、農業に対する「女性の感性」に関する描写を二つ挙げておく。ともに新規就農者の、大石まりなと数住花枝のエピソードである。



左：図 25 まりなの感性（『あの山越えて』15巻、P20）

右：図 26 花枝の感性（『あの山越えて』7巻、P59）

この二人には共通して、「変わり者」という表現が（自称・他称ともに）作中で使われている。取り上げた場面は、まりなについて君子が「顔に似合わず豪快なのが好き」と評し、花枝の就農動機について野菜が「とてもきれい」だったから「そういうものを作り出せる仕事にあこがれた」というもので、前者が女性らしくないのに対し、後者は非常に女性的

なものに描かれている²³（ただし、どちらも周囲の人間からは「変わっている」と評価されている）。

4-4. 「女性的」であることによる保障

「女性的」要素を持つことで、従来ならば村への帰属を許されなかった存在である同性愛者が村で暮らし続ける—このような傾向を読み取れる別の2つの作品について、補足として、ここで触れておくことにする。

いがらしみきお『かむろば村へ』²⁴では、男性の同性愛者が同じ職場の男性と同棲を始めたことが発覚し、職場を退職するが、村で暮らし続けている。彼、「みんちゃん」は、元の職場は旅館の調理場であったが、自分はプロの料理人にはなれないが、「プロじゃなくてもいいや、オレが作ったもの食べてみんな喜んでくれればって」と、村の人々に物々交換で食事を提供している（モグリの食堂のようだが、法的な問題をクリアするために金銭による代価は受け取っていない）。

「みんちゃん」の普段は眼鏡で隠されている目（図 27）や、提供するのがプロの料理ではなく、郷土の家庭料理であるということも、女性的なものを連想させる。言うまでもなく、家庭料理は「おふくろの味」などに示されるように、女性の表象である。「みんちゃん」は、ゲイで村から浮いているとしても、ステレオタイプの女性的な存在に転化されることによって村にいたることが保証されているとも読めるのである。



図 27 同性愛者の「みんちゃん」
（『かむろば村へ』1巻、P94）

先の百合子の例もそうであるが、従来は農村表象の中で同性愛者やトランスジェンダーは、排除されてきた。これは日本だけのことではなく、英国農村社会学においては、90年代以降、Philo (1992) を嚆矢として、農村表象では白人・男性・異性愛が中心で、「他者」である非白人・女性・同性愛、貧困などが排除されていることが指摘されている²⁵。日本で

²³ ただし、花枝の趣味は「日曜大工」である。

²⁴ 小学館『ビッグコミック』にて2007～08年連載。単行本全4巻。

²⁵ これらの研究動向については、Little (2006) 参照。表象研究が先行したが、90年代半ばに農村の同性愛者（ゲイ/レズビアン）のライフスタイルなど実態研究も行われている。

もその点に関しては同様の傾向があり、特に外国人については未だに巧妙に排除されていると思われる。

異性愛中心の農村で、同性愛やトランスジェンダーが決して排除されないものとして描かれるようになった、という点では、従来の農村におけるセクシュアリティのステレオタイプ以外のものが描かれるようになったと言える。

しかし、その描かれ方をみると、そのキャラクター造形（外見）や物語内での役割において、女性的な要素を持つ存在が料理能力やコミュニケーション力など女性ジェンダーを引き受けており、従来の農村における性別役割が反映されている。これは、農村におけるジェンダーがかなり強固であり、さらに強化されていることと同時に、セクシュアリティにおける再構築がなされる際に、ジェンダーに関してはステレオタイプを用いることで、読者に対する「わかりやすさ」を求めたものであろう。

岩本ナオ『雨無村役場産業課兼観光係』²⁶では、『あの山越えて』や『かむろば村へ』とは逆に、村に残れなかった男性が登場する。同性である主人公・銀一郎に恋愛感情を抱く澄緒である。澄緒は作中で上京して俳優として成功をおさめ、将来的に村に戻るとは約束しているが、それは老後（少なくとも年齢的に性愛が大問題にならなくなってから）であろうことが示されている。

結局、澄緒は村では居場所を得ることができず、離郷するという結末になっていることが重要である。澄緒は東京でいきなりスカウトされ、オーディションに受かってしまうなど、少なくとも容姿のレベルは相当に高い。また、人に好かれる性格でもある。アイドル的扱いを受けていても、村から浮いていたという描写も特にないが、本人が特に希望したわけでもなく、成り行きで離郷してしまう。「成り行き」、つまり本人の意思ではない、何か構造上の力による排斥が働いたととらえてもいいのではないか。

彼については、女性的な要素を持っているという描写は特に見られないのである。同性への恋愛感情も、澄緒が好意を寄せた銀一郎と、澄緒に好意を寄せるメグしか知らないので、村で生きていくこともできたかもしれないが、同世代の、もっとも付き合いの深くなるであろう二人に知られているということは、大きな壁になったのかもしれない。銀一郎への好意が表面に出るたびに、澄緒が姿を消してしまうのは、その葛藤の大きさの暗示ともとれる。

現に、メグが同級生女子と銀一郎を引き合わせている場所に同席させられた際、彼は視線をそらし、激しく動揺している。これは、自分が「いてはいけない場所」に踏み込んでしまったという自覚ではないか。同級生女子から将来の夢を問われ、「……今すぐこの世から消えることです」（図 28）と答えるコマが続く。このコマは小さく、描かれているのはメ

²⁶ 小学館『flowers 増刊 凜花』にて 2007～09 年連載。単行本全 2 巻。

グの家の遠景であるが、この台詞は重要である。直接にはその場にいることがいたたまれず、「穴があったら入りたい」という意味だろうが、この時点で、澄緒にとっての「この世」は「雨無村」に他ならないのだ。

マンガ作品において、連載打ち切りなどにより、作者の意図から外れた結末になるケースは少なくない。しかし、この作品の場合は当初の予定より連載が長期化しており、「あっさり終わった」というあとがきでの作者の言葉から、この結末は作者にとっては納得のいくものであったということも推測できる。この結末は、「村」で育った作者の中のイメージに即したものの、少なくとも壊すようなものではなかったと考えられるのである²⁷。



図 28 村に居場所を持たない澄緒 (『雨無村役場産業課兼観光係』第 1 巻、P66-67)

²⁷ あとがきに、マンガの下書き段階であるネームも、「ほとんど [編集からの] ダメ出しはなかった」とある。おそらく、この編集者は最初の提案からして、掲載誌の他の作品にはあまりないシチュエーションを求めてはいても、青年誌のような問題作を狙ってはいないことが推測される。そうであれば、衝撃的な結末よりも、「村」らしさ (これは読者の、ということだが結局は編集者の、ということになる) を壊さない結末を認めた、と考えるのが妥当だろう。

5. まとめ—農業・農村と女性の結びつき

5-1. 学術・政策面とポピュラーカルチャーにおけるステレオタイプとその変化

以上を見ると、政策・学術面でもポピュラーカルチャーにおいても、「女性＝自然」というイメージから女性と農業・農村が馴染みやすく、「出産・育児」「食」など性別役割と農業生産を結びつけるというステレオタイプが形成されていると考えられる。

「女性」性と農業・農村は、強固なステレオタイプイメージの存在によって結びつけられている。例えば、4-3(3)での柔軟性・適応力も「女性」と「自然」の結びつきの応用となっている。だからといって、決してそれだけではなく、ステレオタイプの再構築が常に行われていく。特にポピュラーカルチャーの中では、登場人物（キャラクター）の性格付けをはっきりさせるための対比が行われることもあって、新しい女性イメージが提示されるとともに過去のステレオタイプの継続が同時に見られる。

具体例としては、先にも取り上げた『あの山越えて』の中では、「妻」「嫁」と「職業」を両立させる主人公の女性や、「変わり者」とされる女性新規就農者たちが登場するが、実は物語を読めば、姑（親世代）の存在による影のサポートがそれをかろうじて成立させているのだということがわかる。そこでは、ステレオタイプを崩す新世代とステレオタイプを引き受ける旧世代が描かれ、先に述べたトランスジェンダーとその父の関係もこれに当たる。ここから一般的に言えるのは、新しいイメージの提示の際に引き合いに出されることでステレオタイプも強化されるということである。

ここで興味深いのは、従来のネガティブなステレオタイプイメージ、例えば「女性＝自然」のようなイメージが継承されつつも「男性（＝文化）」の劣位に置かれないというように、近年はポジティブに捉えられる傾向があることである。これは農業／工業、農村／都市、男性／女性といった二項対立構造がなくなったということではなく、むしろイメージとしては強化されつつ、その評価が変化したと捉えられるべきであろう。

従来のステレオタイプイメージな存在についても、『あの山越えて』のように、少なくとも決して否定的には描かれていない作品がある。このような描かれ方に対して、フィクション作品の都合の良い絵空事、単なるノスタルジーや「バックラッシュ」であるとは言えないのではないか。渡辺（2006）では、プラスイメージによる抑圧の隠ぺいが危惧されていたが、「女性／男性だから」と無条件に引き受ける（背負わされる）ことがなければ、従来のジェンダー・イメージに基づく性別役割分業の形態をとることも一つの選択肢として十分にありうる、ということではないだろうか²⁸。

²⁸ もちろん、ジェンダー・イメージの存在そのものが、例えば性同一性障害の苦しみといった問題を引き起こしているのであり、単純に肯定はできない。しかし、高橋（2004）が述べたように、単純な性差二元論を無批判に受け入れるのではなく、「男性と女性との間に

もう一点、農業・農村マンガにおいて、出産しない女性や派手な服装や化粧の「悪い嫁」（とその候補）、また、出産（生産）不能のシンボルであろう同性愛者のような存在が登場するのが、90年代後半以降である²⁹ということも注意しておきたい。4-4節末でも触れたが、これらは「農村らしさ」（の表現）には適さないというイメージが影響を及ぼしていると思われるのである。

ポピュラーカルチャーの方が一般には革新的である（時代を先取りする）と考えられているであろうし、商業的には話題性が重要となるため（商業的成功を収めるかどうかはさておき）、ステレオタイプを壊す作品が求められる。しかし、農業や農村を扱う場合には、今更、という程に現実社会の変化の後追いとなっている。これは、農業や農村とその住民が保守的であるというイメージが、いかに強固であるかを示していると言えるだろう。

5-2. 女性の位置づけの変化とその背景

農村女性（農村婦人、農業婦人）に対する政策は、女性の地位向上に主眼を置いてきた。現実に女性が農業労働において6割を占めているにもかかわらず、その労働内容が補助的労働に限られる、所有権を与えられない、経営者となれないなどの問題を解決しようとしてきた。しかし、農業の担い手が高齢者・女性が占めていくことは「問題」と認識されていた³⁰。これが変化するのが1990年前後であった。92年の農山漁村女性に関する中長期ビジョン『新しい農山漁村の女性 2001年に向けて』では明確に、農業・農村における女性の重要性を打ち出している。

この時期には農村に対する政策「指向」の変化も見られる。それまでは「遅れた」農村地域を都市に「近づける」という変革指向であったが、90年代に入ると明確に農村らしさを「保存・維持」という方向に変わっている。言い換えれば農村の位置づけが、変革されるべき否定的なものから保存・維持されるべき肯定的なものへと変化しているのである³¹。

女性の位置づけに戻れば、地位向上を図らねばならない周辺的存在から、農業や農村を

より多くのグレーゾーンを許容する方向に進んでいく」というのが現実的であろう。

²⁹ 4節で取り上げた作品以前には、1994年開始の「じゃじゃ馬☆グルーミンUP」、1999年開始の「GREEN」で同性愛者をにわかせる表現が登場するが、結果的にはどちらの作品でも異性の恋人を得る描写があり、異性愛者の冗談だったとされている。

2001年、西炯子の「薔薇姫」が、農村の園芸農家の息子と、同級生男子の恋愛をテーマとした。これは読み切りであるが、大手商業マンガ誌で、初めて明確に農村での同性愛が描かれた作品だと思われる。

³⁰ 大島綏子（1993）、P18。

³¹ この「指向」の転換については、一宮（2004）参照。

担う主力（のひとつ）に転換されているのである。第1章でも熊谷（1995）の指摘を取り上げたが、現在はさらに、過疎・高齢化と少子化によって地域維持が困難になっていることが背景にあるだろう。

第1章でも述べた様に、熊谷は、高齢化・男性労働力減少の代替としての女性労働力であると指摘した。それとほぼ同時期の、中長期ビジョンの報告書にもそれに関する説明の中でも、「女性が住み（暮らし）やすい」場所にしなければならない、と繰り返し出てくる。

現在では、さらに過疎高齢化が進み、限界集落が問題となっている。農村地域維持のためには、その地域で生活し、出来れば子供を産んで人口増（少なくとも維持）に貢献する女性が不可欠なのだ³²。それは明言できないであろうし³³、過疎・高齢・少子化対策でもあるとは明示されないが、その意図は明らかに読み取れる³⁴。だからといって農家の「嫁」では女性を惹きつけることができないため³⁵、農家主体となり「活躍する」女性を育成するというのが限界であるのだろう。

5-3. おわりに

ポピュラーカルチャー（特にカウンターカルチャー）は、既存の価値観に対する破壊力を持っている。それは作品の商品価値の一つとして、それまでにはないものを描くという斬新さ・話題性の追求によるものである。ステレオタイプの破壊とは、例えば黒人差別へ

³² もちろん、そのためには農業以外の職業を持つ女性であってもかまわないのだが、それは別系統の「田舎暮らし」＝移住を進める定住促進対策事業などで行われている。

³³ 中長期ビジョンの策定段階において、「女性が農業労働にどう従事すべきかと考え始めたときに、そんなことをいうから若い嫁さんが農業を毛嫌いするんだとか、都会の専業主婦のように働かなくても食べていけるという姿を描かないから都会の女性が敬遠するのであって、そんなことは言わないほうがいいという辛辣な意見もいただいた。」（大島、1993、P20）とある。それが誰の意見であるかは分からないが、とにかく女性に（できれば「嫁」として）農村へ来てほしい、という意図が含まれているように読める。

その他の説明の中でも「[農村は] 人間的な温かみがある一方で、その関係が窮屈な閉鎖的なイメージを与えてしまう。そういうことによって、農林水産業、農山漁村の外からお嫁さんに行く人たちにとっては、異質な社会ということになるので、農山漁村そのものもおおいに垣根を低くして、いろいろなところと交流して、新しい価値観も持ち込んで、若い人にも魅力のある社会にしていく必要がある。」（上掲書、P25）などとあり、基本的に農村に来る女性については農家の後継者と結婚する女性を想定しているようである。

³⁴ 中長期ビジョンでも、冒頭には、女性の地位向上推進の背景として、人口減少による農山漁村の崩壊の危機が挙げられている程度で、直接の言及はない。15年後の現在では、ますますそれは言えない状況になっていると思われる。

³⁵ 大島は「お嫁さん」という言葉は適切でないという意見もあるが、それに代わるいい言葉が見つからないので使う、と断った上で使っている。ビジョンの中でも「『農家の嫁』等慣習・慣行に基づき使用されている様々な用語についても、社会通念としての意味・解釈の見直しや使用の是非の検討が必要である」とされ、農政においてもイメージ戦略が考慮されていることがうかがえる。

の対抗として提唱された“Black is beautiful”というような意味付けの転倒や新しい意味・対象の付与、それまで存在しなかったものの取り込みによって行われる。

先にも述べたように、農業・農村と結びついた女性イメージは、こうしたステレオタイプの破壊によって、過去のイメージはその意味付けをずらされながらも、より強化されている。

ここに、イメージの政治性がある。新旧どちらも選択可能でありながら、政治的な力学によって、どちらかが「正しい」として選択されるという結果がありうる。実際には、在籍するカテゴリーによる弁別、つまり女性ならば女性らしくということではなく、個人の能力に応じた適材適所が理想的な形であるけれども、その時、旧来のイメージが障壁となりやすいという問題はあるだろう。ステレオタイプの存在自体が問題なのではなく、事実無根の不当なステレオタイプである偏見（ステレオタイプ=偏見ではない）や、ステレオタイプによる個人差の無視から生じる差別が問題なのだ。

人々の持つイメージの力は、匿名性を帯びるがゆえに大変強固なものである。ポピュラーカルチャーに表れてくるイメージは強制力を持たないが、身近なレベルで意識の中に刷り込まれている。多様性の存在という観点からは、それらのイメージの払拭ではなく、ステレオタイプとされるものもそれと異なるものも、どちらも存在可能となるような社会が目指されるべきであろう。

参考・引用文献

- 秋津元輝「基本法下における農政の農村認識—白書記述の分析を通して—」、『村落社会研究』第2巻第2号、1996年、P19-30
- P・ブルッカー（有元健・本橋哲也訳）『文化理論用語集 カルチュラル・スタディーズ+』、新曜社、2003年
- 平野貴子「現代の女性観」、女性学研究会『女のイメージ〈講座女性学1〉』、勁草書房、1984年、P1-23
- 市田（岩田）知子「生活改善普及事業に見るジェンダー観—成立期から現在まで—」、日本村落研究学会（編）『家族農業経営における女性の自立』（年報村落社会研究第31集）、農山漁村文化協会、1995年、P111-134
- 一宮真佐子「一農村像としての“田園空間”概念に関する考察」、『2004年度日本農業経済学会論文集』、日本農業経済学会、2004年、P271-276
- 一宮真佐子「ポピュラーカルチャーにおける農業・農村表象とその変化—現代マンガを対象として—」、『村落研究ジャーナル』Vol.29（第15巻1号）、日本村落研究学会、2008年、P13-24
- Ichinomiya, M., An Analysis of the Image of "Women in Japanese Rural Areas" in 'manga', *Proceedings of the 1st Next-Generation Global Workshop*, 2009年, P626-640
- 飯田祐子「文学とジェンダー分析」、上野千鶴子（編）『構築主義とは何か』第3章、2001年、P85-107
- 岩崎由美子「農村における女性起業の意義と方向性—農村の女性起業実態調査を通じて—」、日本村落研究学会（編）『家族農業経営における女性の自立』（年報村落社会研究第31集）、農山漁村文化協会、1995年、P169-190
- 女性に関するビジョン研究会編『新しい農山漁村の女性（農山漁村の女性に関する中長期ビジョン懇談会報告書）』、創造書房、1992年、P4
- 熊谷苑子「家族農業経営における女性労働の役割評価とその意義」、日本村落研究学会（編）『家族農業経営における女性の自立』（年報村落社会研究第31集）、農山漁村文化協会、1995年、P7-26
- 呉智英『現代マンガの全体像』、双葉社、1999年
- Little, J. Gender and Sexuality in rural communities. In Cloke, P. et al. (ed.), *Handbook of Rural Studies*, Sage, London, 2006, P365-378
- M・ミース「序」、M・ミース、C・v・ヴェールホフ・V・B=トムゼン（古田睦美・善本裕子訳）『世界システムと女性』、藤原書店、1995年、P13-31
- 中寫邦「国家的母性—戦時下の女性観」、女性学研究会『女のイメージ〈講座女性学1〉』、勁草書房、1984年、P235-263

- 中道仁美「農村女性研究の展開と課題」、日本村落研究学会（編）『家族農業経営における女性の自立』（年報村落社会研究第31集）、農山漁村文化協会、1995年、P135-166
- 大島綏子「目指す女性像を提示—農山漁村女性に関する中長期ビジョン」、農政ジャーナリストの会（編）『日本農業の動き No.104 変わるか、農業・農村と女性』、1993、農林統計協会、P16-37
- Philo, C. Neglected rural geographies: a review. *Journal of Rural Studies*,8, 1992, P193-207
- 高橋裕子「ジェンダー・アイデンティティの実践—性差二元論への囚われ—」、池内靖子、二宮周平、姫岡とし子（編）『改訂版 21世紀のジェンダー論』、晃洋書房、2004年
- 竹内オサム・米沢嘉博・ヤマダトモコ編『現代漫画博物館 1945-2005』、小学館、2006年
- 靄理恵子『農家女性の社会学 農の元気は女から』、コモンズ、2007年
- 若桑みどり『戦争が作る女性像 第二次世界大戦化の日本女性動員の視覚的プロパガンダ』（ちくま学芸文庫版）、筑摩書房、2000年
- 渡辺めぐみ『農業労働とジェンダー 生きがいの戦略』、有信堂、2009年
- C・v・ヴェールホフ「農民と主婦が資本主義世界システムの中で消滅しないのはなぜか—継続的『本源的蓄積』の経済学に向けて—」、M・ミース、C・v・ヴェールホフ・V・B=トムゼン（古田睦美・善本裕子訳）『世界システムと女性』、藤原書店、1995年、P34-78

図版資料

- いがらしみきお『かむろば村へ』、講談社、2007～2009年刊行、全4巻
- 岩本ナオ『雨無村役場産業課兼観光係』、小学館、2008～10年刊行、全3巻
- 矢口高雄『おらが村』、翔泳社（復刻版）、1995年刊行、上下巻
- 矢口高雄『ふるさと』、双葉社（文庫版）、2002年刊行、全8巻
- 矢口高雄『新・おらが村』、中央公論社、1990～92年刊行、全4巻
- 夢路行『あの山越えて』、秋田書店、2003年～継続中、17巻（2011年3月現在）。

2010年度次世代研究「農業・農村と女性表象の親和性に関する研究」(研究代表：一宮真佐子)による成果である。

【メンバー】()内は2010年度プロジェクト時点

一宮 真佐子 (京都大学大学院文学研究科グローバルCOE研究員)